

David Cabecinha パブリックトーク

「アルカンタラの25年の歴史、将来の構想について語る」

日時:2018年11月6日(火) 19:00-20:30

場所:森下スタジオ

私はアルカンタラ・フェスティバル(以下、「アルカンタラ」)の共同芸術監督で、カーラ・ノーブルソーザと一緒に共同芸術監督を務めています。彼女は私がアルカンタラに入る前からフェスティバルに関わっていました。現在、社会が大きく変化する中で、アルカンタラが魅力あるフェスティバルであり続けるためにはどうすればいいのかを話し合っています。アーティストにはもちろん、国際的なシーンにとって、そしてリスボンの観客にとって魅力的なフェスティバルは何かということです。

アルカンタラの舞台はリスボンですが、リスボンだけではなく、世界中で様々な変化がおこって起きています。アルカンタラが創立された時は街に若くフレッシュなエネルギーを呼び込むことが課題でしたが、現在はそれをどのように維持できるのかと考えています。

アルカンタラの25年の歴史が始まった背景

まず始めにアルカンタラの25年の歴史を振り返りたいと思います。ポルトガル、リスボンではその25年の歴史の中で、様々な重要な変化がありました。そうした変化への応答としてフェスティバルがどのように発展してきたのかをお伝えすることがとても重要です。

アルカンタラが始まる前は「Dances in the City」と呼ばれるフェスティバルでした。Dances in the Cityは1993年に始まったのですが、それ以前の1974年までポルトガルは48年間に渡る独裁政権下にありました。ポルトガルは鎖国状態で、他国から文化的影響を受けない状態でした。

独裁政権が崩壊後、文化政策に変化が起きましたが、その変化が起こる前からとても重要な民間の財団があり、ポルトガルの芸術全般に対して大きな影響を持っていました。ダンスや音楽、美術、写真、映画などへの影響です。その財団はカルースト・グルベンキアン財団(Fundação Calouste Gulbenkian)で、国立バレエ団が設立される前にポルトガル初のプロのバレエ団を設立しました。Dances in the Cityというフェスティバルが1993年に始まる際に関わった振付家やダンサーの多くはこの財団が立ち上げたバレエ団に所属していました。1956年から活動を始め、1984年にアカルテ(ACARTE)という教育プログラムを立ち上げました。そのプログラムではポルトガルの国内外の人々の「出会い」を率先してつくりました。特に、1987年から90年にかけて、アカルテ・ミーティングと呼ばれる、「出会い」ためのプログラムがあり、初めてポルトガルに様々な舞台芸術のアーティストが紹介されました。例えばローザスのアン・テレサ・デ・ケースマイケル(Anne Teresa De Keersmaeker)が招へいされ、ワークショップが行われました。ポルトガルのバレエ団にいたダンサーが初めて新しい世界観に出会うきっかけとなりました。

このプログラムのディレクターを務めていたマダリナ・ペルディアガン(Madalena Perdigão)が1989年に逝去し、プログラムの内容が変わってしまいます。そして、アカルテ・ミーティングが終了し、振付家やダンサーの出会いを継続する試行錯誤が続きました。

Dances in the Cityの設立

1993年、振付家のモニカ・ラパ(Monica Lapa)がポルトガルのダンス・プラットフォーム、Dances in the Cityを始めました。最初の2つのエディションは基本的にポルトガルのダンサーを中心としました。1993年の1回目のフェスティバルでは、Vera Mantero、João Fiadeiro、Aldara Bizarroなどが紹介されました。彼らは「ニュー・ポルトガル・ダンス(New Portuguese Dance)」と呼ばれていました。ニュー・ポルトガル・ダンスは、ニューヨークのポストモダン・ダンスやフランスとベルギーのダンスの影響が強く、多様な価値観を内包していました。

1995年からポルトガル国外のアーティストも紹介され、海外アーティストは一度だけでなく、再度、招へいされ、アーティストの活動と、リスボンのシーンや観客をつなげる工夫がされていました。また、作品を紹介するだけではなく、シンポジウムやディスカッション、ワークショップが開催され、振付家やダンサー、批評家、研究者が集まり、アートの意義、作品の芸術的な意義、社会や政治的意義について考える試みも行われました。

1998年からはそれまで1年に1回だったフェスティバルが2年に1回となり、その2年の準備期間中に様々なエクステンジ・プログラムが行われ、アーティストが交流できる仕組みが作られました。こうしたエクステンジのプログラムはリスボンだけではなく、世界中のポルトガル語を話す国、つまり旧植民地でも行われました。「Dance What Is Ours (私たちのものであるダンス)」というタイトルでした。そのプログラムは旧植民地に支配的な態度で向かうのではなく、その土地で行われているパフォーマンス・アーツの実践からお互いに学び合うという趣旨でした。

アーティストはダンスのスキルやテクニックを交換するのではなく、どのような世界観を持ち、どのようにダンスを実践しているのかを共有し、お互いの影響や将来の構想について考えるプラットフォームでした。エクステンジ・プログラムに参加したアーティストの作品がフェスティバルで紹介されました。ポルトガル圏のブラジルやケーブ・ベルデ、アンゴラ、モザンビークなどのアーティストが参加しました。

ダンスからパフォーマンス・アーツのフェスティバルへ

2004年が「Dances In The City」というタイトルで行われる最後の年でした。この年のサブタイトルはAlcantara(アルカンタラ)でした。これはアラビア語で橋をかけるという意味です。2004年以降このフェスティバルはアルカンタラとして続いています。この年からダンスだけではなくパフォーマンス・アーツのフェスティバルとなりました。

アルカンタラでは、ダンスや演劇だけではなく、美術分野でパフォーマンス・アートのアーティストを紹介しています。2006年からアルカンタラというタイトルでフェスティバルを始めましたが、それまでの特徴は受け継ぎ、開催時期も前身のフェスティバルと同じ5月から6月までの3週間で開催されました。

2008年は3週間で35作品を紹介した大規模なフェスティバルになりましたが、それ以降はポルトガルの経済危機の影響もあり、フェスティバルの規模を縮小しないため、アーティストの交流を促すディスカッションや批評家を育てるワークショップがなくなりました。一方で、それ以降のフェスティバルではより海外のアーティストを紹介できるようになりました。

もう一つの特徴として、2008年以来、レジデンシーの施設の運営を始めました。金属加工工場として使用されていた建物の床にリノリウムを敷いて、スタジオとして使えるようにしています。今このスタジオの後ろを改築し、アーティストが滞在できる施設を作っています。

また、ワン・ステップ・スペースというご紹介したいプロジェクトがあります。これはアーティスト間のコラボレーションのプロジェクトで、もともと3つの異なる機関で始めた共同事業です。ポルトガルのアルカンタラ、スロベニアのExodos、それから、ブリュッセルのKVS、この三つの機関が共同して立ち上げました。複数のアーティストを招聘し、それぞれの実践をワークショップやセミナーなどの形でシェアしています。色々な問題について対話も行います。例えば、境界線、戦争、断絶、孤立、障害、懐疑心、対話、経済、団結などの問題が議論されています。これらは対話のテーマではなくキーワードです。アフリカのブルキナファソや南アフリカ、セネガル、ヨーロッパからもクロアチアやスロベニア、それからパレスチナなど様々です。その中で、それぞれの視点から世界中で発生している権力の衝突や、将来に対する不安などをシェアしました。このワン・ステップ・スペースというプログラムは2015年から2017年までの2年間行われました。これに関わったアーティストがその後も継続してコラボレーションをして創作を継続しました。このように、アーティストが集まり、それぞれの葛藤や世界観、コンテキストなどを共有し、そこからコラボレーションが発生していくというフォーマットは非常に意味があると感じています。

ポルトガルの経済危機とパフォーマンス・アーツのシーン

私が大学を卒業した時期は、ちょうど経済危機のピークでした。私は演劇の勉強をして、卒業をし、幸運なことに劇団に就職することができ、俳優、ドラマトウルク、アシスタント・ディレクターとして色々な仕事をしてきました。これは私の同年代の人たちに比べて非常に幸運なことでした。経済危機の中で、特にインディペンデントの劇団や組織というのは助成金を削減され、立ち行かないという状況でした。

私たち以前の世代は、卒業したらバレエ団や劇団、ダンスカンパニーに就職するチャンスがありましたが、私たちの世代はそれが全くありませんでした。自分たちで機会を作り、作品を創作・発表するようになりました。これは非常に興味深い現象で、文化や芸術の生産についてのお金が全くない状態で、若いアーティストは何か作って行きたいという切実な動機で、最小限の中で試行錯誤するようになりました。

それはある意味システムを歪めるといふか変化させることになりました。お金は全くないけれども、切実に作品を作りたいと思っているアーティストが当時たくさんいました。フェスティバルやプログラムをなにか団体がやろうとした時に、お金をアーティストに投資できなくても、紹介できる作品を作りたいと思ってくれるアーティストがいるという状況でした。

この状況の際に一番重要だったのは、たくさんアーティストがいて作品を作っていたわけですが、そこで行われ、生まれたことに対する批評が全く行われていませんでした。批評を交換し、作り、育てる場がありませんでした。雑誌もなかったですし、ブログもありません。アーティストはたくさんいても、シーンがとても分散していました。そのため、批評的な思考を作っていく、育てていくという傾向が全くありませんでした。

この数年の間にリスボンの劇場のアーティストックなディレクションの方向性も変わって来ました。それに従ってプログラムも変化してゆきました。ほとんどの劇場のプログラムは、アルカンタラやその後が始まった似たようなフェスティバルのモデルをなぞって、公開する期間はフェスティバルの期間や、劇場での公開期間も短くなりました。その中にレギュラーな割合で国際的なアーティストを紹介し、同時にリスボンやポルトガルの若いグループを紹介するプログラムとなっています。リスボンには現在人口が300万人くらいいます。そうした規模の都市の中で、12-14件くらいのインディペンデントな公演があります。

アーティストの提案するプロジェクト、「7年間の7つの作品」

私たちが新しく共同ディレクターになる前に始まったプロジェクトがあります。20115年、アルカンタラのアソシエート・アーティストになったクローディア・ディアスが提案したプロジェクトです。「7年間の7つの作品 (7 years 7 Pieces)」というプロジェクトです。毎年、他のアーティストと共同で作った新作を発表します。その新作はその年に彼女が出会った新たなコラボレーターとの共同創作です。

クローディア・ディアスは40代前半の女性のアーティストで、社会的にも状況が厳しい状況で、どのようにしたら持続可能なプラクティスができるのかを考えています。政治的な状況での、彼女なりの政治的なステートメントであり、彼女のプロジェクトを受け入れることがアルカンタラの政治的なスタンスになります。すでに彼女は三作品発表しています。それぞれの作品が1週間の中の曜日の名前を持っています。『月曜日右翼に気をつける』、『火曜日すべて固体のものは空気に溶け出してゆく』、『水曜日サクランの時』などです。

私たちは新しくアルカンタラの共同ディレクターになりましたが、クローディアのプロジェクトは引き続き続けていきたいと思っています。彼女との契約も共同制作が進めやすい条件になるように書き直し、作品を広める体制も整えています。彼女のプロジェクトは非常に面白く、ポリティカルなコンテクストを見出すことができます。

アルカンタラの今後のビジョンと方向性

今後のビジョンについて、今、話し合っている内容をお伝えします。歴史があるフェスティバルですので、これまでのプログラムとの一貫性を保ちつつ、これからも継続していくために必要なことについて、もう一度問い直し、いくつかのキーコンセプトを設定しました。つまり、どのような価値観を持ってこれからフェスティバルをデザインしていくのかということです。

第一に、公平性です。年齢や障害の有無、民族的背景やジェンダー、宗教の信仰、セクシャル・オリエンテーション、どのような仕事と生活のバランスと保っていくのかという人生の方向性や決断、そういったことに対してすべて公平であることです。次に透明性を保つことです。スタッフに対して、どのような決断をするのかというプロセス、それからコミュニケーションのプロセスに対して透明性を保ちます。また、作品の成功を測る指標を観客の動員数や売上などの定量指標ではなくて、よりオルタナティブなアートの質を測る指標を考えたいです。そして、多文化間の対話を継続し、より強化したいです。様々な文化的背景を持つ人たちとの交流を推進したいと思います。コンテンポラリーなアートの実践を、より広い観客に対してアクセス可能にしたいです。

これらについて最初だけではなく、継続的に話し合いたいと思っています。これらについての対話から具体的な活動が生まれると考えています。様々なパートナーやオーディエンスに対して、アーティストたちに対して、いつもこれらの考えを伝えながら対話しています。言い換えると、アーティスト、キュレーター、観客が一緒に様々な社会の問題に向き合い、対話をするという場を作るということでもあります。どうやって場を作っていくのかというのはその時代、その場によって違うとは思いますが。わたしは今回来日するのが初めてで、日本の文化やコンテクストは、私にはまだ未知のものです。それでも、注意深く見てみると、そういった場を作る関心やそ

こにある問題意識はとてグローバルに普遍的なものがあると感じます。では、コンテキストが違うときに、何が共通するのかを理解することにとても興味を持っています。

来日中、**Kyoto Experiment**を視察できたことがとても意味がありました。キュレーションの一つのラインとして、今回は女性性でしたが、こういったとてセンシティブなキュレーションのラインをどうやって多様性を通して見せていくことができるのかに成功していると思います。それを見ることができたのは非常に大きな収穫でした。

アルカンタラでもそういったことをやって見たいと思っています。もしかしたら、一つのテーマだけでなく、いくつかの問題、テーマ、キーワードかもしれませんが、それらをまず特定してそのテーマに関連する作品をプログラムすることによって、その問題を深く掘り下げていく、それに対してディスカッションをする場というものを作りたいと思っています。

長期間日本に滞在する事によって、これまで作品を知らなかったアーティストと出会い、対話ができるというのもコラボレーションを作っていく上で有効なかたちだと思いました。作品の背景を正しいかたちで観客に伝え、どのようなプログラムと一緒に組んでいくのかを決断するために必要な情報は、直接アーティストに出会う機会があることによって得ることができたと思っています。何らかのアイデンティティやパフォーマンス、表象という事に対するステレオタイプに陥ることがなく、よりセンシティブで洗練された形でプログラムを作っていくということが、この経験を得たことでできたという実感があります。

次のフェスティバルは**2020年**を計画しております。これまでフェスティバルは5月から6月に開催されていましたが、**2020年**からは**11月**に開催しようと考えております。**11月**に期間を移行することで、よりディスカッションを重視した場をつくることができると考えています。

これまで2年に**1回**のフェスティバルの開催頻度についても、**1年に1回**にすることを考えています。2年に**1回**では、フェスティバルによって生まれる対話が2年後まで待たなければいけないというギャップが生まれてしまいます。もちろん2年に**1回**のフェスティバルだからこそ、その間のエクステンションが重要でそのエクステンションの成果や効果にも十分敬意を払います。ただ、そのエクステンションはより親密なかたちで継続しつつ、そこで生まれる様々な出会いや交流の結果をより観客に対して頻繁に開いていく場を作りたいと思っています。

まず**2019年**の予定としては、私たちがすでに知っているアーティストをアルカンタラのレジデンスに招待し、そこで様々な共同制作を試してみます。その中のいくつかを**2020年**に発表できるようにしたいと思います。これと並行して、**2019年**にシンポジウムやワークショップなど、出会いの場を作りたいと思っています。

詳細についてはまだお話しできていませんが、全体像をお伝えできたと思います。